



第11回自治体国際交流表彰（総務大臣賞） 受賞団体から学ぶ交流の取り組み

（一財）自治体国際化協会交流支援部交流親善課

やまとたかだ
大和高田市・リズモー都市友好協会、大和高田市
(奈良県) 大和高田市 企画広報課

《大和高田市の姉妹都市》
リズモー市
(オーストラリア連邦)



先人の想いを今に紡ぐ

大和高田市は、奈良盆地の西部に位置し、古くから商業で栄えた街です。本市は、1963年8月7日に、オーストラリア・リズモー市と姉妹都市提携しました。これは、日豪間の姉妹都市提携第1号です。

この姉妹都市提携は、高田カトリック教会に赴任した Paul Glynn (ポール・グリーン) 神父と、当時の大和高田市長・名倉仙蔵氏の尽力によるものです。第二次世界大戦中、日本はオーストラリアを攻撃したことにより、戦後もオーストラリアでは反日感情が高まっており、当時、日本とは姉妹都市を結んでいませんでした。その状況を打開するべく、神父は市長と協力し、長年かけて姉妹都市提携に至りました。市民間の交流として、特に若い世代の交流を推奨していこうと、1985年から交換学生制度が始まり、現在まで両市の約350人もが、お互いの市を訪れ、文化や習慣などを学んでいます。

交流の流れが急加速したのは、2013年の姉妹都市交流50周年で、リズモー市を訪問したことがきっかけです。



「大和高田デイ」で展示した折り紙

本市はリズモー市に招かれた立場ですが、何かお返しができないかと考え、リズモー市の子どもたちを「もてなす」イベント「大和高田デイ」を計画しました。リズ

モー市のスポーツセンターを貸し切り、折り紙の展示や浴衣の着付け、茶道や舞踊の披露など、日本の良さをPRしました。持ち込んだ荷物は、段ボール30箱にもなりました。リズモー市職員の方々も、当初は何がおこるのかと、半信半疑で見ていたことでしょうか。しかし、限られた時間で、焦りながら準備する私たちの様子を見て、「手伝えることはないか」と、次々に手伝いを申し出てくれました。このイベントは大盛況となり、色々な方たちと交流を深めることができました。

2014年にはリズモー市長一行が本市を訪れ、次の交流となる姉妹校を締結。同年8月7日、Skype（スカイプ：インターネット電話）で、リズモー市が主催する姉妹都市締結記念式典に、本市がスクリーン越しに参加しました。姉妹校を結んだ学校の生徒たちも招き、スクリーンを通して友好を深めました。以降、毎年8月7日には、Skypeを使った交流を継続しています。遠く7,000km以上離れていても、最新のICT技術でこんなに近くに感じられます。



2014年のSkype交流の様子
この言葉は、歴代の両市長や、友好協会の会員などが引き継いできました。「相手を想う気持ち」と「ICT技術」をうまく融合させ、今後も実のある交流を継続していくことが、先人の願いである全世界の平和につながると考えます。

この言葉は、歴代の両市長や、友好協会の会員などが引き継いできました。「相手を想う気持ち」と「ICT技術」をうまく融合させ、今後も実のある交流を継続していくことが、先人の願いである全世界の平和につながると考えます。

うちこ
内子町 (愛媛県)

内子町教育委員会 自治・学習課

◀内子町の姉妹都市▶

ローテンブルク・オブ・デア・タウバー市
(ドイツ連邦共和国)

交流のきっかけは「町並み保存」

内子町は、国の重要伝統的建造物群保存地区に選定された家並みの保存、農村景観保全、農林業の活性化、国際交流などの取り組みに力を入れてまちづくりを進めており、ローテンブルク・オブ・デア・タウバー市（ローテンブルク市）と2001年より友好都市盟約、2011年より姉妹都市盟約を結んでいます。

1986年、「町並み保存とまちづくり」をテーマに「内子シンポジウム'86」を開催。中世の町並み保存の取り組みで世界的に有名なローテンブルク市のシューバルト市長（当時）をお招きしたことがきっかけとなり交流が始まりました。それ以降、市長・町長や議員などの公式訪問のほか、市民・町民の相互訪問、青少年海外派遣事業、町職員やハム・ソーセージ職人を目指す青年の長期研修などさまざまな分野で、草の根の交流が続けられています。



内子町の歓迎交流会で和太鼓演奏を体験

人材育成から生まれた内子の味

ハム・ソーセージ職人となった青年は、道の駅「内子フレッシュパークからり」に在籍しています。内子豚などを使って本場の味を提供し、内子の名物のひとつとして大変好評を得ています。また数年前、町並み保存地区の空き家にドイツ料理店がオープンしました。目玉メニューとして、青年の作った加工品を使った料理が提供

されています。本格的なドイツ料理店は西日本でも珍しく、大変人気があります。さらに、姉妹都市交流を記念し、2013年より毎年、町民手作りのドイツフェスタを開催。ソーセージなどのドイツ料理や、ドイツ音楽に触れる良い機会となっています。

次世代を担う青少年の派遣

青少年海外派遣事業は1995年以降毎年実施されており、2016年に22回目となりました。派遣生は延べ289名、町民の約1.7%が派遣を経験したことになります。

ローテンブルク市では「生きた学び」を得られるよう、ホー



青少年海外派遣では折り紙で交流

ムステイを通じた日常生活体験、町並み保存や環境保全学習、学校訪問など多彩な体験・交流活動を行います。派遣生の多くは、帰国後海外に目を向けるようになっただけでなく、日本や内子町、自分自身を改めて見つめ直し、新たな気持ちで向き合えるようになっています。

内子町国際交流協会との協働

交流は、町と（公財）内子町国際交流協会が連携して行っています。同協会は、ローテンブルク市との交流の中で、「町民が主体となる国際交流活動の母体を」との機運が高まり、1994年に設立されました。町民から1億円、町から1億円（ふるさと創生事業）の合計2億円の資金を基金とし、運営・活動しています。事業の企画・運営を行うプランナーなどさまざまなボランティアが活動しており、ローテンブルク市との相互交流においても町民が密接に関わって交流を進めています。

交流継続のために

活発で深い交流を続けるためには、交流の中で両市町にキーパーソンやその後継者を作り続けることが重要です。定期的な市民・町民レベルでの「Face to Face」の交流こそがその近道であり、今後も町民が主体となった内子らしい国際交流を続けていきたいと考えています。